

自己確証が態度変容に及ぼす影響

今城志保・藤村直子・佐藤裕子 (リクルートマネジメントソリューションズ 組織行動研究所)

キーワード：自己確証，態度変容，ユニバーサルベーシックインカム

背景

自己価値を再認する操作によって、自分に脅威となる情報を受け入れたり、ネガティブなステレオタイプの影響を受けにくくなるといった効果が報告されている (Cohen & Sherman, 2014)。このような効果は、自己確証 (self-affirmation) によって自己の統合性が高まり、自分の能力や人間性が保たれているとの認識によってもたらされるとしている (Steele, 1988)。自己価値再認研究の多くは、改善すべき生活習慣に扱ったものや、ネガティブなステレオタイプの影響を扱ったものである。

一方で自己の統合性の高まりは、より広範な影響を示唆する。たとえば、自己価値再認によって情報に接する際の資源が増える (Creswell et al., 2005)、あるいは、情報を自分と関連付けることで価値を見出す (Falk et al., 2015) などの説明がなされている。本研究では、社会的な物事に関する態度の変化について、自己価値再認が自分の態度と反対のメッセージを受け取った際に及ぼす影響を検証する。

予測 自己価値再認によって、自分の態度への反対意見を受け入れやすくなるだろう。この程度は、情報が自分に関連すると思うほど強くなるだろう

今回は、一般的な社会的な事象であるが、自己との関連性に個人差があると考えられる「ユニバーサルベーシックインカム (以下 UBI)」に対する態度を題材とする。説得による態度変化の研究では、自分の意見について自信を持つほど、説得の効果が弱まることが示されている (Brinol et al., 2007)。自己価値再認により、自分の意見により自信を持ち、元の意見を変えにくくなる可能性についても併せて検証する。

方法

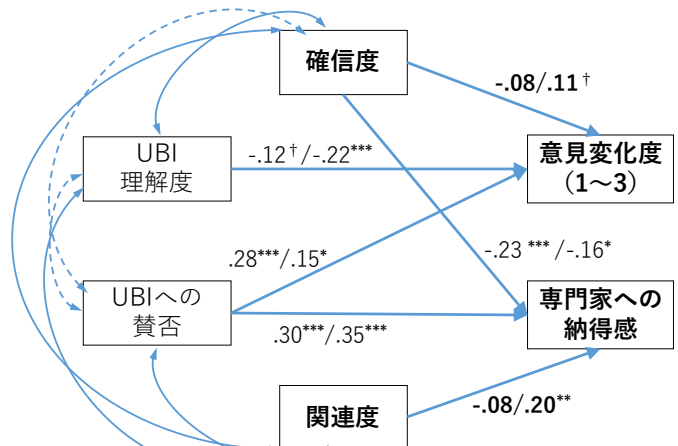
20代～50代の会社勤務の男女社員を対象に、オンライン実験を行った (実験群 260名、対照群 244名)。実験参加者は、UBIに関する簡単な説明文を読んだ後、UBI理解の程度 (UBI理解度)、UBIへの賛否、UBIが自分に関連すると思う程度 (関連度)、自分の意見に確信を持つ程度 (確信度) について、いずれも6段階で評定を行う。その後、実験群は自己が重視する価値について、対照群は自分が重視しない価値について、重視する理由やエピソードなどを記述する。その

後、専門家の意見として自分と反対の意見を提示される。再び UBI への賛否と、専門家への納得感を尋ねた。

結果と考察

態度の変化を検証するため、まず操作前と操作後の賛否の評定について、変化なし、1点変化、2点以上変化の3値に変換し (意見変化度)、平均差をみたが両群に有意差はなかった (実験群 1.44, 対照群 1.48)。次に専門家への納得感を確認したが、こちらも2群間には有意差がなく (実験群 3.59, 対照群 3.63)、予測は支持されなかった。次に関連度と確信度の影響を検証するために、共分散構造分析の多母集団分析を行った。理解度は統制変数としてモデルに投入した。結果は、図のとおりである。実験群でのみ、自分の意見と反対の専門家への納得感に対する関連度の影響が有意になり、予測を支持する結果となった。確信度の変化度への影響も、実験群のみ有意傾向となった。自己価値を再認した場合、自分の意見を確信していた人ほど意見を変えたことから、自己価値再認は自分の意見に対する自信を高めるわけではなかった。

意見変化や専門家への納得感の平均値差が有意にならなかった理由に、先行研究と比べて情報の自己との関連度が低かったことが考えられる。ただし、自己確証は、特定条件の下で、自分の一般的な態度に対する反対意見を受け入れる方向に作用することが示されており、今後は自己価値再認効果が生じるための制約条件について、検討を進めたい。



対照群/実験群,
数字の太字は2群間で有意差
共分散は2群で同じに設定
*** $p < .0001$, ** $p < .001$, * $p < .05$, $^{\dagger} p < .10$

$\chi^2 = 5.42$, $df = 13$, $p = .96$
AGFI = .988, TLI = 1.08,
RMSEA = 0.00, AIC = 63.422

図 多母集団分析 最終モデル